

8412「なぜ結婚するの？」と・・・

「なぜ結婚するの？」

と質問したら、

「そのほうが、生活がラクになるから」

と答えた男の子がいたのには、ビックリした。いまは、共働きとやらが常識だから、

「結婚すれば、収入が倍になる」

というのである。

「なるほど、そんなものかなあ」

と、ビックリした、というよりは、感心した。

青木雨彦『男と女の泣きボクロ』

[許容訳例]

I asked some young people, “Why are you getting married?” and was astonished to receive the answer from a boy: “Because marriage will make me better off.”

The “two-income marriage” is quite common nowadays, he explained, so that marriage doubles one’s income.

“I see. Maybe you’re right,” I said, rather impressed than surprised.

[翻訳例]

There was one boy who, when I asked why he was getting married, replied to my astonishment that it was because he’d be better off that way. Marriage, he explained, meant doubling one’s income—“two-income marriage”, it seems, being the thing nowadays.

I nodded, pondering his reply with a feeling less of surprise, perhaps, than of admirations.

■「なぜ結婚するの？」と質問したら、「そのほうが、生活がラクになるから」と答えた男の子がいたのには、ビックリした。(8412)

★「なぜ結婚するの？」の「結婚する」は、目的語がない場合、普通、会話などでは marry ではなく get married を使います。

◆Why do you get married?/ Why are you getting married?/ Why will you get married?

「なぜ結婚するの？」ですが、ここでは Why do you get married?という使い方はできません。この形（現在時制）にすると、たとえば、Why do you smoke [go to school; read newspaper]?と同じように habitual action ということになってしまいます。つまり、「しょっちゅういろいろな人と結婚する」という感じになってしまいます。ですから、この場合は、もしこの質問をしている相手がすでに結婚することに決まっているのなら、Why are you getting married?（現在進行形）となり、また、今は具体的な結婚話はなくても将来結婚するとしてということであれば Why will you get married?（未来形）です。もっと一般的な意

場合いで「なぜ結婚するの？」という質問ならば Why do people get married?となります。この場合は people が主語になっていますから habitual action とみてもいいことになります。

★「質問した」は I asked…です。

★「そのほうが」は「結婚した方が」ということですが、the marriage と定冠詞を付けると、特定の相手との結婚する、ということになります。間違いではありませんが、ここは the をとって一般的な意味での結婚にした方がいいと思います。たとえば、Why are you going to run in the marathon?----Because exercise will good for me.というところを Because the exercise will be good for me.とすると exercise の範囲を限定してしまいます。ですから、ここで the marriage にすると、「その相手と結婚するからこそ、生活が楽になるんだ」というニュアンスになってしまいます。

★「生活がラクになる」は be well off (生活が楽だ) を使って will make me better off が一番いいと思います。

★「男の子」は、子供をさしているわけではなく、年配の男がずっと年下の同僚の青年などに対しても使います。話題が話題ですから「結婚しても不思議でない年頃の青年・若者・同僚」のことです。英語の boy(e.g. the boys at the office)にも同様の使い方があります。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(・・・と答えた男の子)

「・・・と答えた男の子がいた」は「連体修飾節(・・・と答えた)＋不定代名詞的体言(男の子)」を含む文です。「・・・がいた」ですから There was one [a] boy who replied that…が基本的な文構造です。なお、「答えた男の子」の箇所を「男の子の答え」と名詞化して訳すなら the answer from a boy となります。a boy's answer とすると不定冠詞の a が boy に懸かるのか answer に懸かるのかあいまいです。場合によっては a boy's face (いかにも少年らしい顔)と同じように「いかにも少年らしい答え」という意味にもとられてしまいます。

★「ビックリした」は I was quite astonished です。この場合、be surprised は使えません。be surprised には「理性的判断」が含まれます。

◆be + p.p. と get + p.p.について

「ビックリした」の I was quite astonished ですが、この was を got に変えることは出来ません。たとえば、When I said that, he got quite angry [anxious; disappointed].という場合には got も使えます。非常に微妙な違いなのですが、これらの形容詞は、ある程度その状態に至るまでの process が目の前に見えるような感じなのです。つまり、何かを聞かされて、その意味を理解して反応が表れるということなのですが、それに対して astonished という言葉は、その瞬間に間髪を入れず反射的に返ってくるような反応という感じの形容詞だからです。

●「直接話法と間接話法」

英語では、直接話法(引用符)を使うときにはどのような表現でやりとりされたかを伝える場合で、臨場感とか実際性についての関心は希薄です。一方、日本語で直接話法(引用符付きの文)を使うのは臨場感と実際性の伝達を意図しているからで、どういう表現を使った

かに対する関心はそれほど高くないと思われます。つまり、英語ほど、話法の概念が明確ではなく、引用符が直接話法として使われたり、単に内容を強調するために用いられたりするのです。たとえば、この文章では「なぜ結婚するの?」と「そのほうが、生活がラクになるから」は直接話法でしょうが、「結婚すれば、収入が倍になる」と「なるほど、そんなものかなあ」は英語で言う直接話法ではない可能性が感じられます。表現上のこのようなずれについて、翻訳では対象語の習慣に合わせないと、かえって内容の真意が伝わらないと思われます。全体として、英語では、普通、この程度の話題・長さの内容に対しては間接話法の方が自然です。間接話法を使わないと、英語らしい英語にならないことが多々ありますし、直接話法を多用すると幼稚で子供っぽい感じになってしまうのです。ですから、[許容訳例]では直接話法も許容していますが[翻訳例]は間接話法にしてあります。

●文構造

ところで、文の構造ですが、この日本文は、ある男の子（青年）がいて、その男の子はどういう考え方をする子であったかということが最初に説明されているわけですが、話の焦点としては、そういう男の子がいたのにはびっくりしたということです。ですから、それを間接話法で書くと、「ある男の子がいた」(There was one boy)「その子にどうして結婚するのか尋ねた」(when I asked why he was getting married)すると「結婚した方が楽だから」(that it was because he'd be better off that way)「と彼は答えた」(he replied)「それには私はびっくりした」(to my astonishment)ということです。まとめると、There was one boy, when I asked why he was getting married, who replied to my astonishment that it was because he'd be better off that way.となります。この that way というのは便利な表現で、これを使うと if he got married と続けてくどくなるのを避けることができます。

■いまは、共働きとやらが常識だから、「結婚すれば、収入が倍になる」というのである。(8412)

★「いまは」は nowadays でしょう。

★「共働き」はちょっと前までは「共稼ぎ」と言っていたことです。double[two]-income family と辞典には出ていますが、ここでは結婚の話なので double[two]-income marriage でしょう。これは countable なので a か the を付けて使わなければなりませんが、ここでは category として the の方がいいでしょう。

★「～とやら」ですが、「共働きとやら」の「とやら」は「世間で言う「いわゆる・・・」」という意味ですから double quotes で囲って“double[two]-income marriage”とします。

★「常識である」は、be quite common でも間違いではありませんが、ここの「常識」の訳としては物足りない感じがします。つまり、ここでは「共働きが常識だから」ではなく「共働きとやらが常識だから」となっています。つまり、ここの「常識」は「世間で皆がしていること・当たり前のこと」という意味です。そこで、「常識」を the thing として、it(=“double-income marriage”) is the thing nowadays とするといいと思います。この the thing は the thing that everybody does とか the thing that everybody who wants to be fashionable does と

いう意味です。

● [～だから]

「(常識) だから」は、普通なら since it(=“double-income marriage”) is the thing nowadays ですが、「いまは、共働きとやらが常識だから」は誰の認識か曖昧です、それで since を外して“double-income marriage”, being the thing nowadays としたいと思います。というのは since…とするより「コンマ+ being…」を使った方が因果関係を曖昧にできて、この部分を筆者の意見とすることが可能になるからです。英文法の本では、分詞構文の形状は説明していますが、その使い方に関しては説明されていません。ただ、英語には、このように誰が発言したか曖昧にした感じの文章というのはそもそもあり得ないのです。ですから、日本語の意味や表現に近づけるにはこうするしかないように思われます。

★「結婚すれば、収入が倍になる」は、Marriage means doubling one's income です。なお、これはその男の子が直接言った言葉のようでもあるし、先ほどの「その方が、楽になるから」という表現を受けて、その言わんとするところの意味を筆者なりに別の言葉で表現したものとも考えることができます。つまり、引用符で囲まれていて直接話法のようにみえますが、「・・・というのである」と続くので、男の子の発言を作者なりにまとめて代弁したとも考えることが出来ます。したがって、間接話法でもいいのです。

★「という」は「と言った」でしょう。he explained でいいと思います。

★「(という) のである」は伝聞に対する筆者の主観的叙述ですから it seems(=apparently) を挿入することによって、その日本語の言い方や含み・ニュアンスを出すことが出来ると思います。

■「なるほど、そんなものかなあ」と、ビックリした、というよりは、感心した。(8412)

★「なるほど」を直接話法で書くと I see. です。

★「そんなものかなあ」は、直接話法では Maybe you're right. です。これなら「(なるほど) もっともだ、君の言うことにも一理ある」といった漠然とした意味になります。

● 文技巧

「なるほど、そんなものかなあ」は引用符で囲まれていますが、直接言ったことではなく頭の中で考えた言葉とするのが妥当です。つまり、「なるほど、そんなものかなあ」は、若者の考え方に対してはっきりと肯定したわけではなく、君の言わんとすることはわかったという気分でしょうから、「・・・[と]、ビックリした、というよりは、感心した」の[と]は「・・・と言っ [て]」ではなく、「・・・と納得し、・・・した」で、中間話法的に Yes, he may be right, I thought…とも書くことができますが、「・・・し・・・した」は英語では「主動詞(I thought,)+句((being) rather impressed than surprised)で表すことが出来ます。さらに英語的に補って、日本語の順序通りに、まず「ビックリした」を先にもってくると、I nodded, pondering his reply with a feeling less of surprise, perhaps, than of admiration. という表現になります。なお、perhaps は「とにかくビックリしたが、考えてみれば、感心した」といった方がいいかもしれない」という筆者の気持ちを汲んで加えたものです。

